

友情は何処から来るかわからない。

上野 新

「えー、では、今日のホームルームはここまで。日直、号令を」
教師の声に応じるように、日直の生徒が起立を促す号令をかける。

「起立、礼」

ありがとうございます。同級生たちは不揃いな挨拶を発し、授業が終わったことによる解放感からか皆思い思いの行動を取っている。友人と一か所に固まって喋っている者、自分の席でおとなしく読書をしている者、そして、そそくさと帰り支度を済ませ、教室から出て一直線に帰宅しようとする者――それが、僕だ。どうしてここまで急いでいるのか。その理由は本日発売の新作ゲームソフト『オレゴンファンタジー7』にある。というか、その『オレファン7』（オレゴンファンタジー7の略称）自体が理由そのものなのだが。

何を隠そう、僕はオレファンシリーズの大ファンなのだ。別に駄洒落ではない。約2年前から発売が告知されており、今日この日をずっと心待ちにしていたのだ。本来ならば朝一番で店頭並びたかったのだが、生憎と今日は平日であるためそれは叶わず、学校からの帰りに店に立ち寄り本作を購入することとした。が、しかし、オレファンシリーズは絶大な人気を誇るゲームだ。かなり急がねばすぐに店から姿を消してしまうだろう。というか、もう既に売り切れているかもしれないが、そこは賭けだ。まだ残っていることを信じて（売れ残っていたらそれはそれで複雑な気分だが）ゲームショップへと出向くしかない。僕は教室から出るべく急ぎ足で扉をくぐろうとした、が。

「田中ア、ちよつと待ってくれよ」

背後から軽薄な声を掛けられ、肩に腕を回される。喉から出かけた溜め息を既の所で飲み込み、至って非常心を装った顔を向ける。

「……なんだい、飯藤くん」

僕のクラスのムードメーカー的存在である飯藤くん。彼は俗にいう『陽キャ』で、よくスクールカースト上位の位置を常に独占してそんな生徒たちとよくつるんでいる。僕とは対極の存在ともいえる人間で、同じクラスではあっても今まで全く関わってきたことがなかったのだが、いったいどうしたというのだろうか。

「いやあ、その、さ……ちよおつと申し訳ねーんだけど……今日の掃除当番、変わってくれませんか！」

彼は非常に申し訳なさそうな顔でそう告げると、勢いよく頭を下げた。姿勢がよい。直角90度である。いや、そんなことはどうでもよい。

僕は咄嗟に返事をするのが出来ずに考えあぐねていた。ここで掃除当番を変わってしまえば確実にオレファン7をゲットすることは不可能になってしまっただろう。もしも飯藤くんが頭も下げずに「ちよい俺の掃除当番変わってくんねえ？ どーセタナカ暇だろーし

べつにいーっしょ(笑)」といった感じで人に対するものの頼み方も碌に知らないような男であったのなら、即座に断っていただろう。だがしかし、飯藤くんは思っていたよりもきちんとした人間だったらしい。わざわざ僕に頭を下げて、切実な表情で頼み込まれてはどうしたって断りづらい。しばらく、といっても5、6秒程度だが考えた末に、僕が出した結論は。

「……いいよ、飯藤くん」

「マジ!? 恩に着るわ、田中!」

ぼくの承諾を得た飯藤くんは、いつも友人たちと談笑している時に見せるような眩い笑顔でそう言うのだった。

「あのう、すみませんが、○○駅までの道を教えていただけないでしょうか」

あの後全力で教室の掃除を済ませた僕はその勢いのまま学校を出て、ゲームショップへと急いでいた。しかし、その途中でお婆さんに声をかけられたのだ。○○駅までの道のりを聞かれた僕は逸る気持ちを抑えて、なるべく丁寧に道を教える。

「あー、まずこの道を真っすぐ行ってください。したら、十字路に出ると思うので、そこを右に。そのまま行ったらコンビニと横断歩道があると思うので、その横断歩道を渡って左へ直進。したら今度はT字路に出ます。ここをまた左へ行ってください。そこからしばらく歩いたら○○駅に着くと思いますよ」

「はい、はい……えっと、道を真っすぐいくと、T字路に……」

「あー違います。このまま真っすぐ行くと出るのは十字路です」

「ああ、すみませんねえ……十字路に出て、それから……たしか……」

「右に曲がるんですよお婆さん。したらコンビニと横断歩道があるので……」

これは長くなりそうだ。僕は笑顔と柔和な声を心掛けながらも、勿論お婆さんは何も悪くないのだが、内心で溜め息を吐くことをやめられなかった。

「う、売り切れ……やっぱダメだったかあ……」

それからお婆さんが漸く道順を完璧に覚え、僕が解放されたのは声をかけられてから優に15分は経った頃だった。僕はもう、急ぎ足などではなく猛ダッシュで店へと向かった。しかし時すでに遅し。僕が店に到着した頃にはもう既に、オレファン7は売り切れた直後らしかった。

薄々分かっていたこととはいえども、かなり急いだ分やはり体力面、精神面共にかなり消耗してしまっている。落胆を隠せない僕はそのままよろよろとぼとぼと店を後にした。

「あれ、田中?」

店から出た僕にかけられた声は、数十分前に聞いた覚えのあるもの。僕は緩慢な動きでそちらの方を見やると、そこには僕の子想通りの人物――飯藤くんがいた。

「ああ……飯藤くんか……何してんだい……?」

「な、なんか老け込んでないか田中……? いや、実はお前に当番を変わってもらった理由ってのは、こいつのことなんだよ」

そう言っただけで手に持っていた袋から取り出した物に、僕の目は釘付けになった。

「そ、それ……ッ!」

「オレゴンファンタジー7ってゲームなんだけどな。小学生の弟が欲しがるといって、ちつと奮発しちゃったよ」

そうか、それで今日の当番が変わってもらったように頼んできたのか。僕は納得と同時に、飯藤くんへの見方を改めた。彼は頭の中が空っぽで、単なる軽薄な人間だと思っていたフシがあったのだが、かなり真人間然としている好青年のようだ。

オレファン7は名残惜しいが、小学生の弟くんの為のプレゼンとこのゲームで当然飯藤くんに譲るべきだろう。

「そっか……弟くん、喜ぶと思うよ。オレファンシリーズは傑作だし」

「ああ……って、田中、このゲーム知ってるのか? もしかして、今店から出てきたもの……?」

しまった。ついさっき口を滑らせて余計な一言を零してしまった。僕がどう言い繕うべきかとしどろもどろになっている間も飯藤くんは申し訳なさそうな顔でこちらを見つめると、ふいに彼が口を開いた。

「なあ、よければなんだが、これからうちに来て弟と一緒にやるか? 賑やかな方が弟も喜ぶと思うし……どうだ?」

思わぬ飯藤君の提案に、僕は「え」と返事を喉に詰まらせてしまう。ゲーム。他人の家で。それもクラスメイトの家で。誰かと。いっしょに。

「い……行かせていただきマスッ」

何故かカタコトじみた敬語で返答してしまった僕に対して飯藤くんは、なんだよその声、と快活に笑うのだった。